

■パン職人レオ君の物語

この動画は、「発明をした場合に特許を取ること」の重要性をやさしく説明する動画です。

<第一章のねらい>

- ・簡単なものでも難しいものでも工夫したものは全て発明となることを理解させる。

<第一章のあらすじ>

レオ君は、パン職人です。レオ君の親友のゴリ君は、ロボットなどのメカを設計し、それを組み立てる仕事をしています。ある日、レオ君は、試行錯誤の末、イチゴジャムパンを思いつきます。同じ日にゴリ君は、ゴムの力で人を遠くまで飛ばす巨大なパチンコを思いつきました。ゴリ君は、イチゴジャムパンなんかは発明じゃないと言います。レオ君ががっかりしていると、弁理士のキヨじいさんが現れ、簡単なものでも難しいものでも工夫したものは全て発明となることを二人に教えました。

<第二章のねらい>

- ・特許を取ること、発明を他人に真似されないようにすることができることを理解させる。
- ・他人は、発明品の真似をして簡単に同じ物を作ることができ、発明をするための労力や費用がかからない分、安く売ることができてしまうことを理解させる。
- ・消費者は、同じ品質のものであれば、できるだけ安い物を買う傾向にあり、発明者は発明をするための労力や費用を利益として回収することができないことを理解させる。

<第二章のあらすじ>

レオ君のイチゴジャムパンは評判になり、たちまち村中にひろまりました。となり村のパン職人のシン君は、レオ君のイチゴジャムパンを真似して、自分のお店でイチゴジャムパンを安く売り始めます。同じ味のパンがシン君の店で安く手に入るようになり、村の動物達は、わざわざレオ君のお店にまで来なくなりました。レオ君は、イチゴジャムパンを売のをやめるようシン君に言いましたが、シン君はやめませんでした。村の動物たちも、同じ味なら安いほうが良いという考えでした。レオ君は、イチゴジャムパンを思いつくまでの労力が無駄になり、がっかりします。そんな時、キヨじいさんはレオ君に、「自分が考えた発明を他人にまねされないようにするためには特許を取る必要がある」ことを教えます。

レオ君は、次の新作であるカレーパンを思いつき、売り始めました。案の定、シン君はカレーパンを真似して自分の店で売り始めました。しかし、今回レオ君は、キヨじいさんのアドバイスに従ってカレーパンの特許を取っていたので、シン君はカレーパンを売り続けることができなくなったのでした。

<第三章のねらい>

- ・特許を他人に使わせることができることを理解させる。
- ・特許を他人に使わせることで、特許を持つ者、特許を使わせてもらう者、及び消費者である第三者のいずれにもメリットがあることを理解させる。

<第三章のあらすじ>

レオ君の作ったカレーパンは毎日売切れでしたが、レオ君が持っている機械では、カレーパンをこれ以上多く作ることはできませんでした。レオ君は、どうしたらたくさんの人にカレーパンを食べてもらえるか、頭を悩ませていました。ある日、レオ君のカレーパンの評判を聞きつけて、遠くの町でパン工場を経営するリトおじさんがレオ君を訪ねてきました。リトおじさんは、レオ君が発明したカレーパンを自分の工場でも作らせてもらえないかと、レオ君にお願いしました。レオ君は悩みましたが、キヨじいさんのアドバイスに従い、カレーパンの特許を使わせることで、リトおじさんから実施料（お金）をもらうようにしました。リトおじさんのパン工場で大量に作られて全世界で売られました。おかげで、全世界の人がカレーパンを手にするできるようになり、また、レオ君もリトおじさんもたくさんのお金を手にすることができました。手にしたお金で、レオ君は次の新しいパンの研究に専念することができました。